～ＩＣＴを活用して～
重度障がい者等の就労実現フォーラム

開催報告書

開催概要

【フォーラム名称】～ＩＣＴを活用して～　重度障がい者等の就労実現フォーラム

【主催】福岡市

【リード文】

　福岡市は、誰もが心身ともに健康で自分らしく活躍できる持続可能な社会をつくるプロジェクト「福岡 100」に取り組んでおり、令和４年度から分身ロボット「OriHime（オリヒメ）」を活用した実証事業を行っています。

　今回、ICT を活用した重度障がい者等の就労実現のため、その将来像などに関する基調講演のほか、市の実証事業等に関するパネルディスカッションや、関連する先端技術の展示を行うフォーラムを開催しました。

【開催・日時】2023 年 12 月 4 日（月）14:00～17:00

【会場】福岡市舞鶴庁舎（２階研修室）

【当日参加人数】77 名

【内容】

14:00～　主催者挨拶
14:05～　基調講演
14:55～　パネルディスカッション
※会場内に先端機器を展示（13:15～17:00）

基調講演「先端技術で広がる重度障がい者の活躍の可能性」（14：05～14：50）

講師：吉藤 オリィ氏（株式会社　オリィ研究所　所長）

■概要

・世の中には様々な課題があり、移動困難であったり、様々な形で社会参加が難しい障がいがあるということがたくさんある。そういったことについて、我々はとにかくスピードを上げて開発していこうということをやっている発明集団である。その仲間をぜひ増やしたい。

・東京都の日本橋にある「分身ロボットカフェ DAWN ver.β」では、障がいや難病で外出困難な方 70 人くらいが、オリヒメを通して、ウエーター・ウェイトレス、お店の受付、通訳、観光案内等の仕事をしていて、最近は働き方も増えてきている。こういう働き方をどれだけ増やしていけるか、事例をつくっていこう、ということをミッションとした仲間達でもある。

・物作りに必要なことは、まずは、やってみること。例えば、車椅子を作る際、実際に乗ってみて、点字ブロックがあるところを通るとガタガタして大変とか色々分かることや見えてくるものがある。また、当事者の方達と意見交換することで、快適に走行できる車椅子を作っており、眼球だけで操作する車椅子も作った。

・できないからこそ考えることができることがある。例えば、右手が動かなくなったら、左手で筆を持ち、左手も動かなくなったら、足で筆を持ち、足も動かなくなってしまったら眼球で、文字を書いたり、絵を描いている方がいる。できないことは、価値に繋がる。

・私の研究テーマは、車いすやロボットを作りたいわけではなくて、「どうすれば人が孤独にならずに生きていけるか」である。初めは人工知能の研究をしていて、人と話すことに疲れ、という私も人を嫌いだったので、もう友達ロボットを作ればいいじゃないかと思ったこともあった。でも、人は人から必要とされたいし、人から褒められたいし、あなたがいてよかったって言われたい生き物。つまり、関係性である。

・障がいを負ったり、移動困難になったりした時に、どうやって自分らしく生きていけるか、と本気で考えないと生きることが辛いなって思った時に、人工知能ではなく、もう一つの自分の体を作れないかと作ったのが「OriHime」で、大学の時の研究が今の形になっている。

・「OriHime」にはカメラとマイクとスピーカーが入っていて、その場所に持って行ってもらって、一緒に見て、しゃべりながらであれば、そこに自分も行ったなとか、健康になったらそこに行こうっていう気になれる。

・「OriHime」を学校に設置し、不登校の子も「OriHime」を通して一緒に授業を受け、学校に行けた事例もある。他にも障がい者や移動困難な方も「OriHime」を通して、友達と同じような経験をすることができる。結婚式や観光やスポーツ等いろんな使われ方もされている。

・「OriHime」や様々なツールを使い、一緒に、新たなツールや働き方を開拓していきたい。

・皆さんや家族、仲間などが移動困難等になっても、「じゃあどうすればテクノロジーを使ってそこをカバーしていけるか」、それを本気で考える未来でありたいと思う。

パネルディスカッション　（14：55～16：20）

【パネリスト】

・高垣内　文也　氏（株式会社オリィ研究所　OriHime 事業部　事業部長）
・月生田　和樹　氏（株式会社ローソン　執行役員　事業サポート本部長）
・三舛　善彦　　氏（九州地理情報株式会社　代表取締役社長）
・岩井　隆浩　　氏（株式会社シアン　代表取締役 CEO）
・島田　真太郎　氏（テクノツール株式会社　代表取締役）

【モデレーター】

・片田江　由佳　氏

【内容】

重度障がい者等の就労に関する各社での取組み、取組みの成果・課題や工夫した点、今後の展望など

■概要■

◆高垣内　文也　氏

取組み：分身ロボット「OriHime」を活用した福岡市との共同事業

・令和４年度から、福岡市と共同で、「OriHime」を活用し、外出困難な重度障がい者等の就労や社会参加の可能性を探る実証事業を実施。
・令和４年度の実証事業では、博多区役所で展示品の案内や来庁者への声掛け業務を、高齢者施設で施設利用者とのコミュニケーション業務を行った。
また、高齢者施設での業務に従事した重度障がい者の方のうち９割くらいから「やりがいがあった」とのことであった。
・令和５年度の実証事業では、令和４年度の実証事業から得た成果や課題を踏まえ、高齢者施設や、障がい者施設商品を販売する「ときめきショップ」で、実施場所や実施期間などを拡充して実施している。高齢者施設では施設利用者との会話やレクレーション補助業務を、「ときめきショップ」では商品説明業務などを行っている。
・高齢者施設として業種は同じであっても、施設毎に課題が違うため、昨年度と今年度の高齢者施設の実証状況は違ってくる。マニュアル作成によるモデル化も大変重要だが、施設の実情に応じたカスタマイズも必要。また、施設の環境を見て、どのような業務であれば、OriHime を使って切り出すことできるのかの検討も重要。
・キーワードは、重度障がい者の方の就労する場をパートナーさんとともにどうやって作っていくかということ。自社で運営中のカフェで働きたいという方は大勢いるが断らざるを得ない状況である。今は、働く場がない。適切に評価されて働ける場があることがとても重要。OriHime などのプロダクトを使って、いかに働ける場所を皆さんと一緒に作り上げていけるか、今は泣く泣く諦めていただいている方々を一人でも多く働いていただける環境を作っていけるよう、取り組んでいきたい。

◆月生田　和樹　氏

取組み：アバター接客サービスを提供している会社のサービスを導入してのリモート接客や商品説明等

・アバター接客サービスを提供している会社と組み、令和４年 11 月からアバターによる接客サービスを提供している。ローソン店内のセルフレジ付近にアバターを設置し、セルフレジの使い方の説明から会計決済完了までのサポートを行っている。また、店内の入口付近にアバターを設置し、お客様に挨拶なども行っている。

・アバターは、令和４年１１月に東京、令和５年３月に大阪、そして令和５年６月に福岡市では、博多区東比恵のローソンに導入している。精神障がいや身体障がいの方など様々な方がリアルの店員さんとコラボしながらお店を運営している。
・アバターを操作している方は、ほぼ、全ての方がご自宅で、在宅勤務でリモートワーク勤務しており、地理的な制約、身体的な制約のない、新しい働き方の第一歩として、皆様にご活躍いただいている。
・単純なＡＩではなく、中で人がちゃんとコミュニケーションをとっている状態であるからこそ、気持ち良く買い物していただける状況を作り出せており、今後はさらに店舗の中で皆さんが幸せになれるような環境づくりをしていきたい。
・AI の浸透によって、そもそも人が要らないんじゃないかみたいな世界を我々は望んでいないので、人が必ずいて人の温かさを感じられるようなサービスが提供できる、そんなお店づくりをしたい。それから街へのサービスのご提供ができればと思っている。

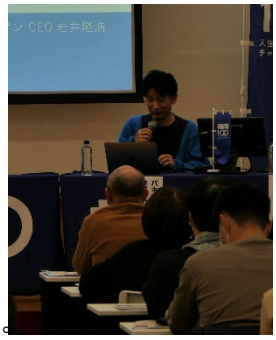
◆三舛　善彦　氏

取組み：自社での障がい者雇用。特に肢体不自由の重度障がい者の方の雇用

・健常者と障がい者による共生社会の実現を目指しており、特例子会社という立ち位置で、社員数 96 名、そのうち障がい者 61 名で重度障がいの方が 20 名弱である。
・業務内容は、ＧＩＳを用いた地理情報システム、一般のシステム開発や運用保守、図面・文書システムの関連事業、その他物販などである。
・社員は、リアル又は在宅テレワークの形態で勤務中。コミュニケーションをどう取っていくかは大事な点であり、色々なツールでどのようにカバーしていくか、非常に重要なキーと考えている。
・テレワークは対面ではないため、画面の向こう側にある本当の姿をちゃんと掴む手段として、朝礼や昼食後の懇談、終礼などで話す機会をつくり、障がいを持った社員のコンディションを掴めるよう配慮していくことを、社員全員が認識することがポイントと考えている。
・今後力を入れたいのが、障がい者向けサテライトオフィスの運営や有料職業紹介という形での事業展開である。長年蓄積してきた障がい者の雇用支援に関するキャリアやナレッジを活かして環境を整えていきたい。

◆岩井　隆浩　氏

取組み：ちょこっと交流（等身大ＶＲ）



・大きなスクリーンを使って、遠隔で交流できるプロダクトを作っており、現在は、スクリーンを使って子どもや高齢者のＱＯＬを上げたり、教育効果を上げたりする事業にシフトしている。
・元々は社会的弱者と呼ばれる人たち向けに作っていたものが、結果は健常者が思い切り楽しめる世界となった。健常者、高齢者、子供及び障がい者の方みんなが楽しめることがわかったため、寝たきりでベッドから出られないなどであっても、メタバースを接続してスクリーンに投影し、交流・会話することで、友達を作ったり、新しい関係性を作ったりする事業を展開している。
・ドローンアクセシビリティー、ドローンを視線で操縦するプロジェクトにも取り組んでいる。
・取り残さない社会をつくるためには、出会いを増やす必要がある。寝たきりであったり、家にずっといる人が、オリヒメなどを知らないことが理由なだけで出来ないことが増えてしまう。人と人が出会う場所をどんどん増やしていって、各社の多様なプロダクトにつなげていくことが必要である。

◆島田　真太郎　氏

取組み：アシスティブテクノロジーを使用した事業展開

・「本当の可能性にアクセスする」をコンセプトに、アシスティブテクノロジーを使った事業を展開している。代表的なプロダクトとして、アームサポートについては、上肢の機能が低下している方などが、自分の小さな力で、食事や読書、パソコン等机上の作業が可能となっている。そのほか、コンピューターアクセスの部分で、パソコンやスマホを使えるようにしようということで、色々な入力手段を提供している。

・筋ジストロフィーの患者さんとドローンを飛ばすことに成功したが、大事なのはドローンが飛ぶか飛ばないかじゃなくて、環境を作れば一見複雑だと思われるようなことも、この人たちも十分できるということ、それを訴えるために各種の事業展開をしている。

・新しいプロダクトを開発する際に重要なのは、当事者の方の参加と、ある程度専門性をもって客観視できるスキルを持った方の参加。当事者でなければわからないニーズがある。

参加者からの意見

・多様な人材が必要という言葉が響きました。
・明るい未来を感じられたフォーラムでした。障がいのある方の希望が見出せました。
・オリヒメという媒体を通すことでコミュニケーションの垣根が下がるというのは、面白く、なるほどと感じた視点でした。
・オリヒメロボット、中にいる方と交流を持ってみたいと思いました。見た事はあっても話しかける勇気がなかった。
・色々な可能性を見出す機会となった。
・重度障がい者、難病などに特化して様々な課題や現状が整理され、知る・見る事ができ、非常に有意義であった
・障がい者の方の雇用場所が色々な形で増えていくようになってほしい。
・先端技術を障がいのある方が自由に使える時代になってほしいと思いました。
・大変参考になりました。Zoom などのリモートと分身ロボットの違い、ロボットだから働ける、話す事ができることが分かりました。
・取り扱われる機会の少ないテーマだと思うので、とても学びが大きかったです。
・発達障がい者の方が対人恐怖を克服するためのツールとして OriHime が使用できたらいいなと思いました。
・福岡市がロボット活用にも取り組まれていることもあり、福祉系の相談窓口等で当事者に活躍してほしいと感じました。